

ビルマ語専攻

異言語を学ぶことは異文化を体験することです。ビルマ語の勉強を通して、ミャンマーの土地に育まれた人々の生活やものの考え方に触れ、異文化について深く考えてみたい人を歓迎します。



あるお寺の境内で出会った子どもたち
(モン州モラミヤイン市、2003年2月)

「おもしろい文字ですね」

「目の検査のようですね」

検眼表の円い図形や知恵の環を思い起こさせるユーモラスなビルマ文字で書かれたビルマ語は、ミャンマー連邦（1989年対外的な英語呼称BurmaをMyanmarに変更）の公用語であり、5,141万（2014年）国民の共通語（母語人口はその4分の3強）です。

ビルマ語の最古の文献は通称ミャゼディ碑文（1112年）で、四面体の石柱にバガン朝のチャンシッター王の遺徳を讃えた顕彰碑がモン語・パーリ語・ピュー語・ビルマ語の4つの言語で刻されています。今では死語となったピュー語が含まれていることから、この碑文は「ビルマのロゼッタ石」と呼ばれたことがあります。

ビルマ語の話し手の社会は、インド文明とシナ文明の影響を受けた点で、また、稲作文化を基調とする点で、東南アジアのほかの地域との共通性をもっています。宗教的には、南伝上座部仏教を信仰する人たちの社会と、社会規範や価値観を共有しています。さらには、少数民族との接触による文化の相互作用も、東南アジア大陸部に共通にみられる現象です。こういった関心は、遠く北方の雲南・貴州の地の人々の文化にも私たちが誘ってくれるでしょう。

ビルマ語を専攻言語として選ぶ人たちは、当然のことながら、まず、ビルマ語の運用能力を身につけることが求められます。そして、その背後にある基層文化を言語・文化・社会の各面にわたって、総合的に学ぶこととなります。また、関連する言語として、チベット語のほか、カレン語など少数民族の言語も学ぶことができます。

（注：「ビルマ」という地名は、幕末の地理書で、箕作省吾の『坤輿図説』（1845年）にみえる「毘爾満」を嚆矢とするようである。—平田由美氏の教示による）



ミャゼディ碑文
(バガン博物館蔵のA碑文)

「タミン サー ピービーラー」

၀၀၆ငးတးပြးပြလား။ (食事をすませましたか)

学生の声



2年 清水 万由

「ビルマってどこにあるの?」「ビルマ語ってどんな文字?」「なんで勉強してるの?」こんな質問を頻繁にされます。何度聞かれても、毎回一生懸命説明します。まだまだ広くは知られていない、私のイチオシの「ほほえみの国ミャンマー」の魅力をもっと多くの人に知ってもらいたい!

私は春に、日緬学生会議でミャンマーに行きました。ミャンマーの学生と日本各地から選ばれた個性ある日本人と1週間、フィールドワークをし、社会問題について議論しました。ミャンマー人は日本人に似ていて優しく、向上心にあふれています。また、たどたどしいビルマ語でも、通じた時の喜びは格別でした。見るもの食べるもの、全てが新鮮で、伝統衣装のロンジーはとてもかわいく、常にワクワクドキドキしっぱなしでした。魅力は語りきれません。以来、完全にミャンマーにはまり、気づけばスマホでミャンマーのことばかり検索している日々です。

「ミャンマー」をキーワードにたくさんの人と出会い、つながり、また新たな人へとつながる。ミャンマーが、どんどん私の世界を広げてくれます。ミャンマーへの興味関心だけでなく、自分の将来の可能性が広がる実感があります。

ミャンマーは今激動の時代です。発展が進んできている一方で、様々な問題も抱えていて、目が離せません。知れば知るほど面白く、学ぶべき奥深い国だと思います。みんなでミャンマーを大好きになりましょう!!



留学体験記



4年 坪川 知之

ミンガラバー! 私は約10ヶ月間ミャンマーのヤンゴン外国語大学に留学していました。大学では中国、インド、韓国など、主にアジアから集まった学生と共にビルマ語の授業を受けていました。ビルマ人の先生方は非常に面倒見が良く、必死に文章を読んでいると「分かっていますか?」と何度も聞いてくださったので先生との距離が近かったように感じます。私の下手なビルマ語でも、なんとか聞き取ろうとしてくださって、いつも笑顔で挨拶を交わしていました。そこにビルマの方々の人の良さを感じることができたので、学校の居心地は非常に良かったです。放課後は近所の市場に行き、店員さんから果物、野菜などを買い、その足で喫茶店に行き新鮮な果物のジュースを飲むという幸せな生活を送っていました。時折、ビルマ人、中国人の友人と遊び、現地の日本人のコミュニティに参加するなど、プライベートの方も充実していたように思えます。このような生活を送っていると、なぜでしょうか、顔がビルマの人々ようになってくるのです、不思議な国ですね。(写真の左はミャンマー到着時、右は到着後4ヶ月経過時。)ミャンマーの雰囲気、人の良さを十分に感じた留学となり、あっという間に過ぎていったように感じます。

今、ミャンマーは世界中が注目している国です。大学で学んだ知識を生かして皆様が活躍するチャンスは十分にあると思います。一緒にこの国の未来を作りましょう。

